

河川環境管理シートに関する 手引きの更新と活用方策

自然環境グループ

主任研究員 白尾 豪宏

本日の発表内容

1. 河川環境の評価の考え方
2. 河川環境管理シートの概要
3. 新たな手引きの更新部分
4. 活用事例と今後の展望



参考文献 :河川環境管理シートを用いた環境評価の考え方
:河川環境管理シートに関する手引きの更新の解説・留意点
:河川環境管理シートの活用方策に関する研究

どういった経緯？



1. 河川環境の評価の考え方

- 2. 河川環境管理シートの概要
- 3. 新たな手引きの更新部分
- 4. 活用事例と今後の展望

どんな考え方？

1. 河川環境施策の経緯

今年、本省版の環
管シート手引きが
発出されました！



平成九年 河川法改正「環境」の追加

平成十四年 河川環境目標検討委員会

平成十八年 多自然型川づくりレビュー委員
会 提言『多自然川づくりへの展開』

平成十九年 河川法改正十年政策レビュー
(評価)河川環境の整備・保全の取組み

平成二十九年 河川法改正二十年多自然
川づくり推進委員会 提言『持続性ある
実践的多自然川づくりに向けて』

平成三十年 実践的な河川環境の評価と
改善の考え方に関する検討会

平成三十一年 『実践的な河川環境の評
価・改善の手引き(案)』

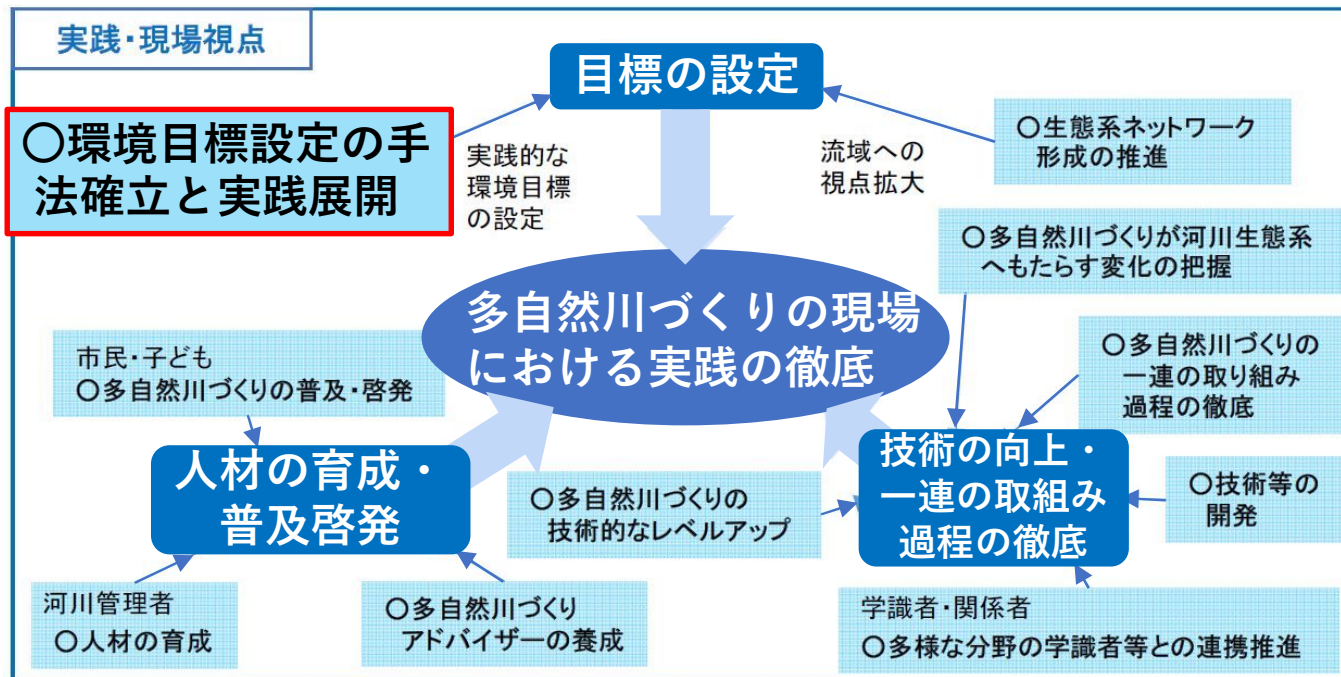
令和四年 『河川砂防技術基準 施設配置
等計画編』第一章河川環境等の整備と保全
及び総合的な土砂管理

令和五年 『河川環境管理シート
を用いた環境評価の手引きー河
川環境の定量評価と改善に向けてー』

河川環境管理シートの作成

2. 実践的多自然川づくりの全体像

○河川法改正20年多自然川づくり推進委員会 提言「持続性ある実践的多自然川づくりに向けて」



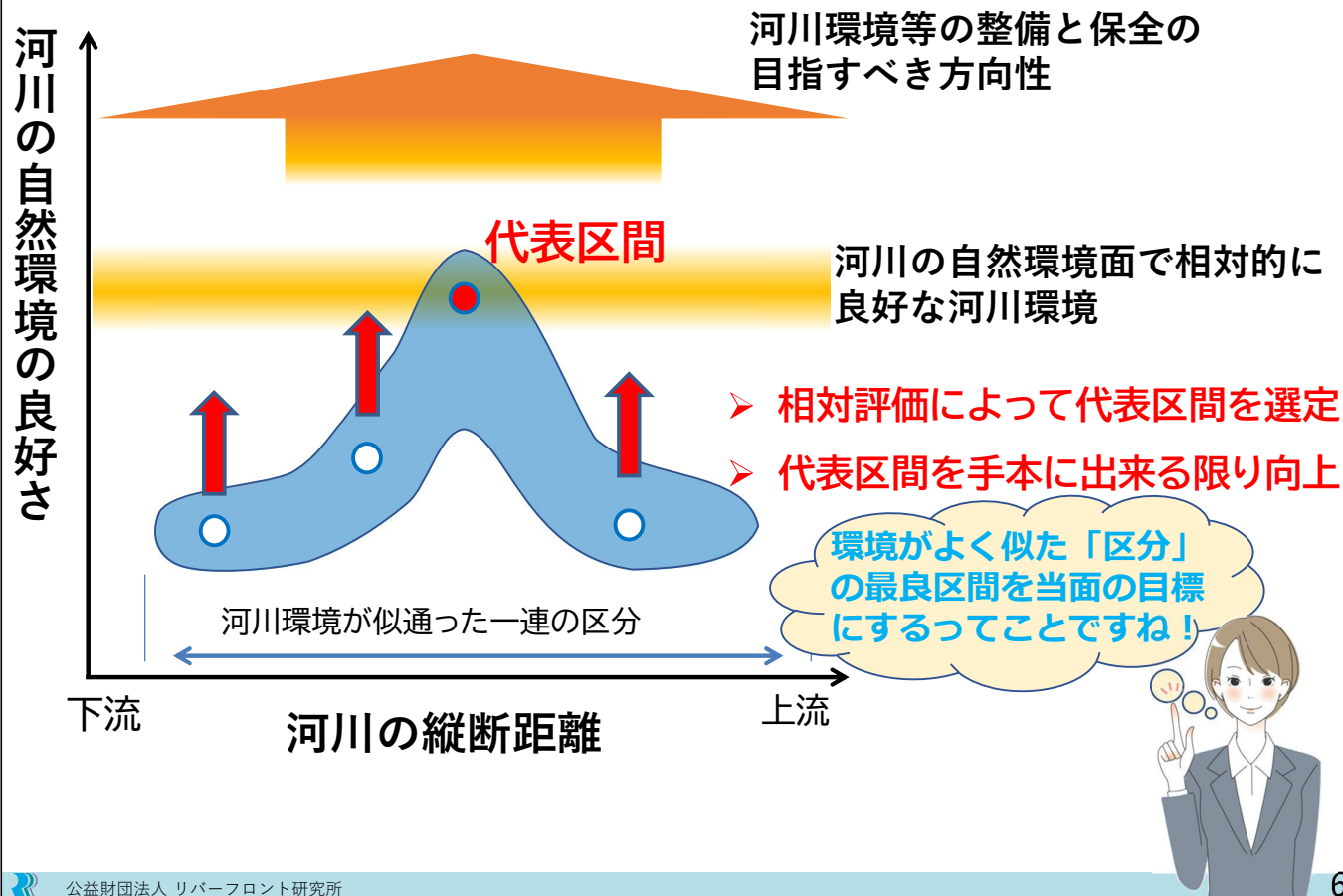
3. 環境目標設定の手法確立と実践展開

○ 環境目標設定の手法確立と実践展開

- **ポイント**：「良好な状態にある生物の生育、生息、繁殖環境を保全するとともに、そのような状態にない河川環境についてはできる限り向上させる」という目標設定の考え方を基本として、河川環境を評価する手法を具体化する。

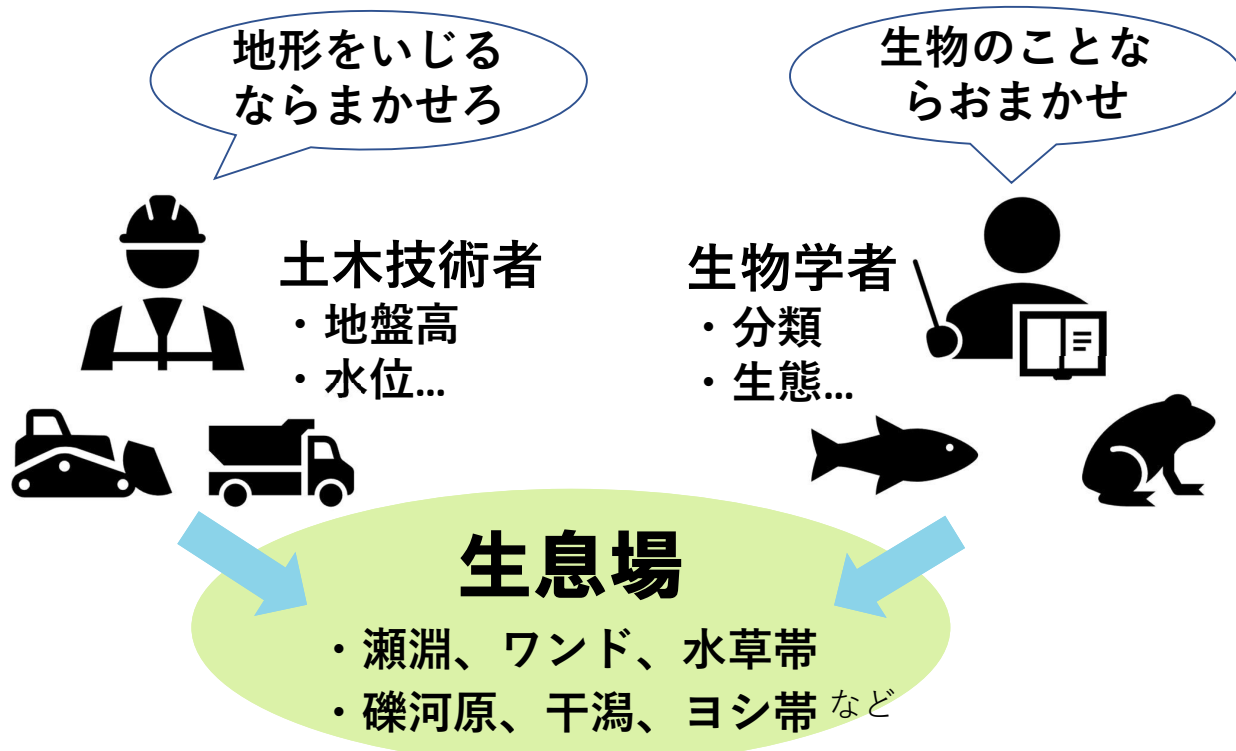


4. 河川環境改善の考え方イメージ



5. 河川環境を評価するうえでの単位

土木技術者と生物学者が理解しあうキーワード



6. 川らしい環境とは

- ・縦断方向に長い
- ・陸域と水域が連続
- ・洪水による攪乱が発生



川らしい環境

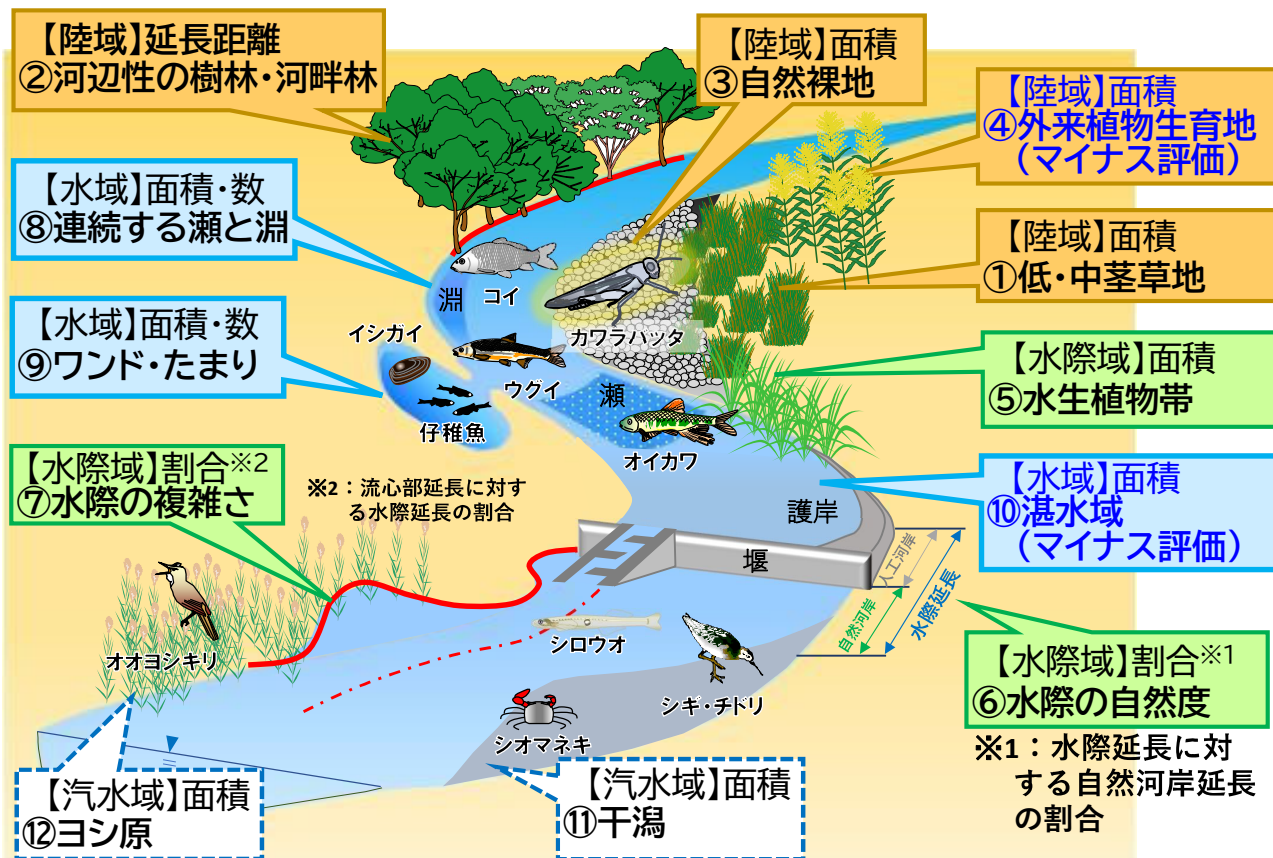
・河川特有の生息場

- ・谷底平野や扇状地帯 → 瀬淵、礫河原、河畔林
- ・自然堤防帯 → 瀬淵、ワンド・たまり、水生植物帯、河畔林
- ・デルタ帯 → 汽水性のヨシ帯、塩沼湿地植生帯、干潟

川らしい環境 = 川にしかない生息場のことですね！



7. 河川環境管理シートの評価項目



8. 河川環境管理シートの評価イメージ

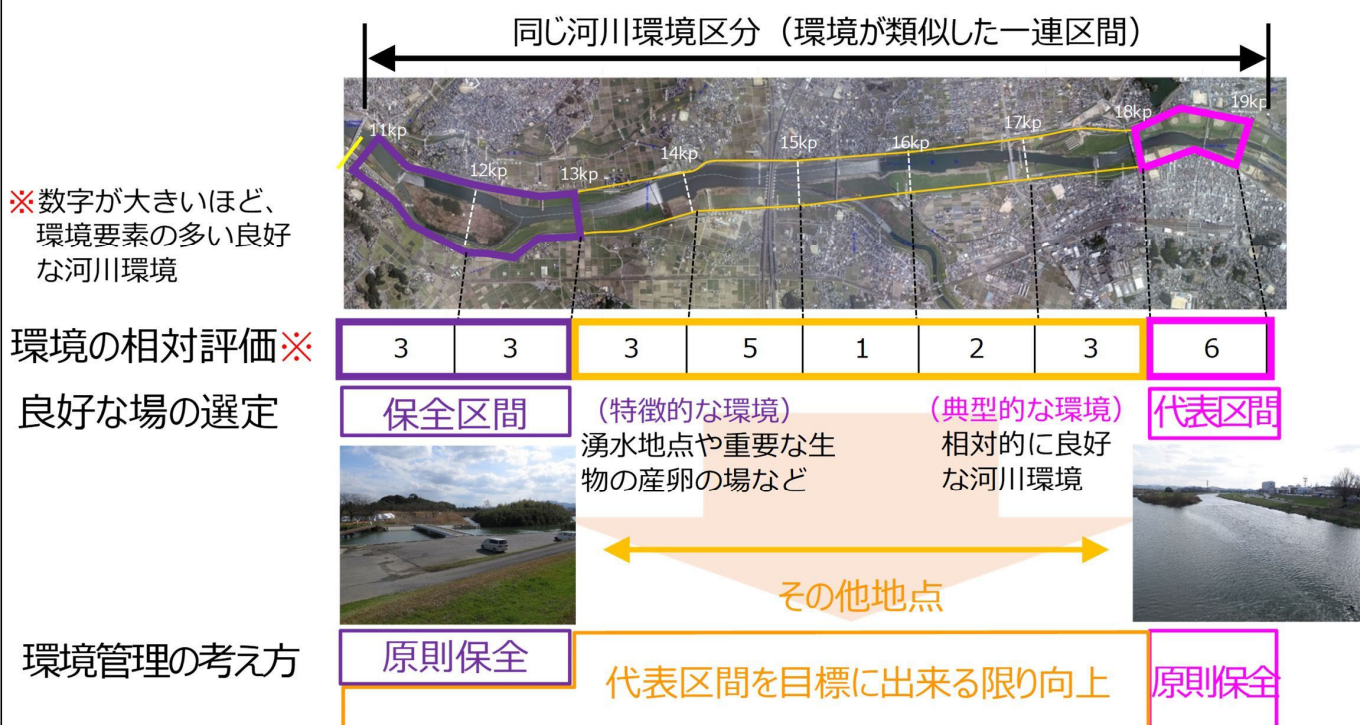
- 典型的な 1 2 項目の環境要素を評価対象
- 中央値を基準に○ = 1点、△ = 0点、× = -1点で加点評価
- 特殊性の 4 項目は通常加点対象としない

		距離標																				
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
生息場の 12環境要素 (典型性)	陸域	低・中茎草地	△	△	△	△	△	△	○	○	△	△	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○
		河辺性の樹林・河畔林	-	-	-	-	-	-	-	-	△		△	○	○	○	○	○	△	△	△	○
		自然裸地*	-	-	-	-	-	-	-	-								△	△	○	○	○
		外来植物生育地	△	△	×	△	△	△	△	△	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	水域	水生植物帯	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	△	○	△		△	△	△	○	○
	水際域	水際の自然度	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○
		水際の複雑さ	○	○	○	○	○	△	○	○	○	△	△	○	△	△	△	○	△	△	○	○
	水域	連続する瀬と淵	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	△		○	○	○
		ワンド・たまり	○	○	○				○	○	○				△			△		△		○
		湛水域	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	汽水	干潟					△	△	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		ヨシ原	△	○	△	△	○	△	○	○												
生息場の 4環境要素 (特殊性)	特殊性	礫河原の植生域	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		湧水地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		海浜植生帯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		塩沼湿地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
総合評価(典型性のみ)		2	3	1	1	3	1	5	6	5	1	1	4	3	3	1	2	2				7

典型性の合計点は場の多様性を示していますね！

9. 河川環境管理シートを基にした環境改善イメージ

- 河川環境区分内で手本となる代表区間、特殊な保全区間を選定
- 点数の低い区間は代表区間を目標に出来る限り向上





1. 河川環境の評価の考え方

2. 河川環境管理シートの概要

3. 新たな手引きの更新部分

4. 活用事例と今後の展望

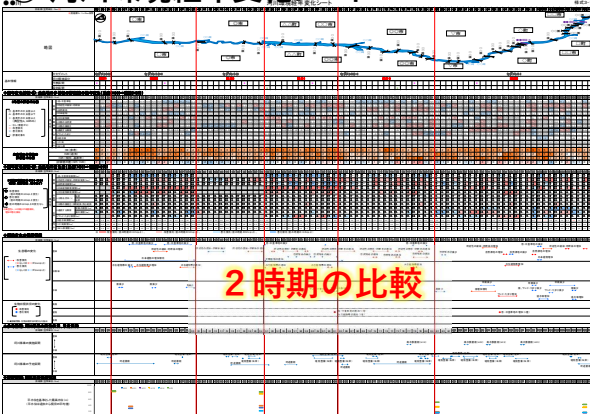


1. 3つの様式の外観

① 河川環境区分シート



③ 河川環境経年変化シート



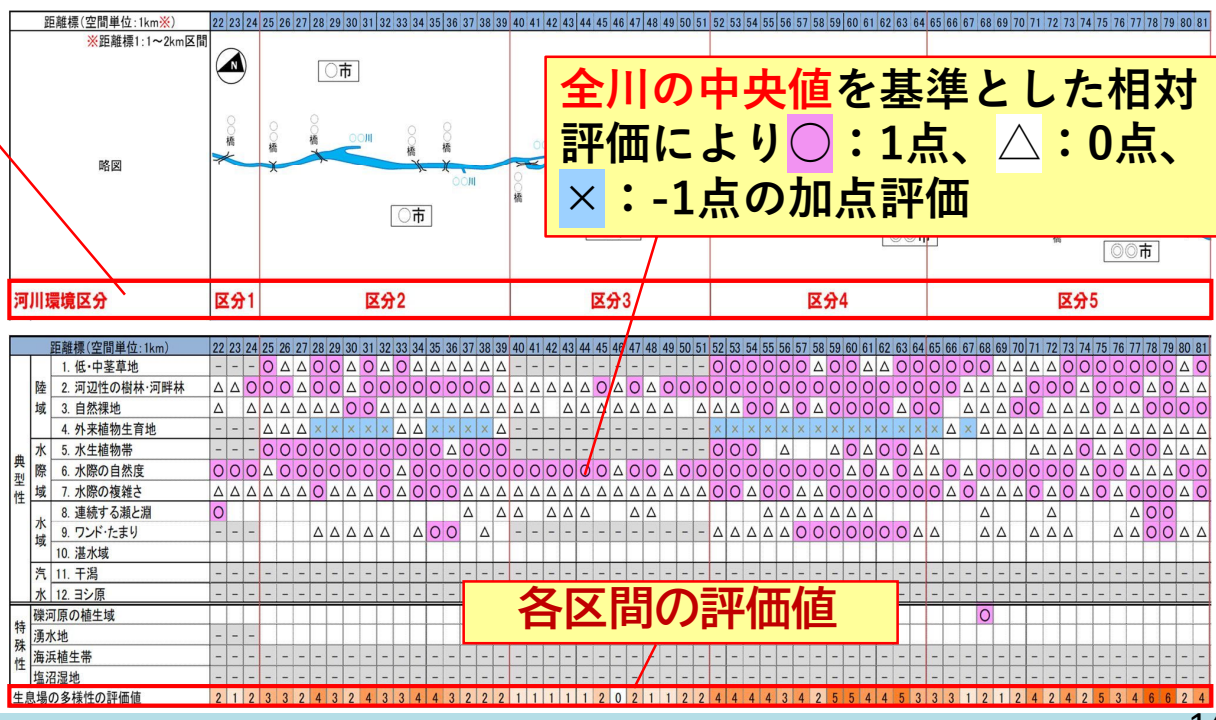
② 代表区間選定シート



2. 河川環境区分シート

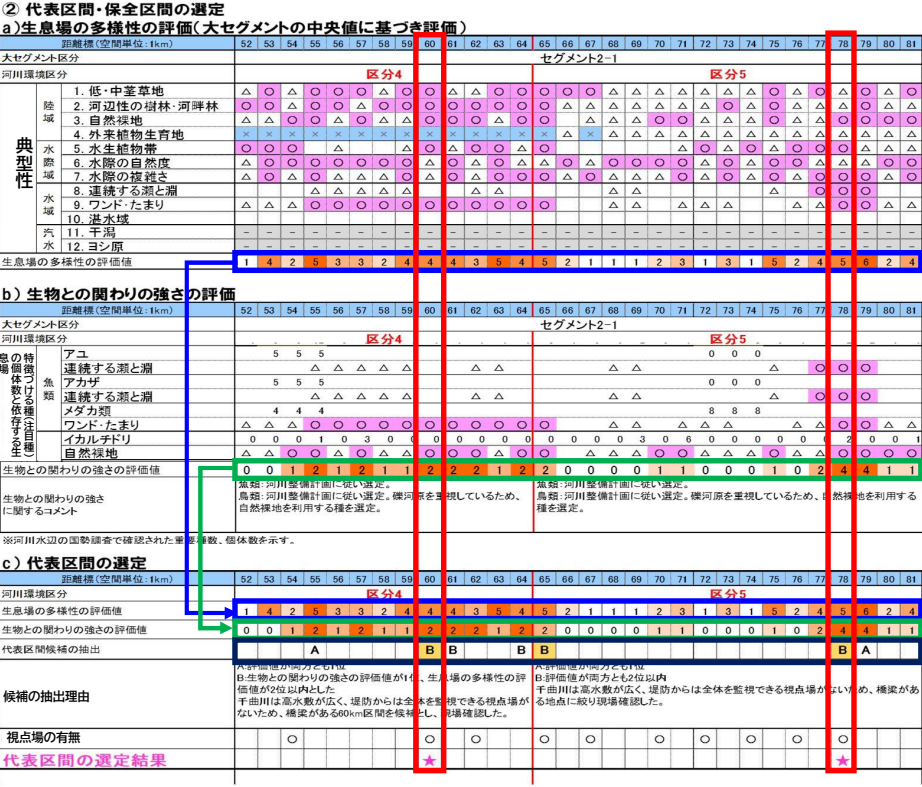
- 「河川環境区分」の区分け、根拠となる情報等を記載
- 1 k p 加点評価で全川の良好・不良区間を可視化

「河川環境区分」に区分け



3. 代表区間選定シート

- 1 k p 加点評価で河川環境区分ごとの良好・不良区間を可視化
- 「代表区間」「保全区間」を設定



- 大セグメントの中央値を基準とした相対評価による加点評価結果
- 「注目種」が依存する環境要素の数を加点評価
- 上記を合算した評価値等に基づき「代表区間」の候補を設定

4. 河川環境経年変化シート

○最新年の大セグメントの中央値に基づき2時期の環境要素の変化状況、評価値の差分を示す

距離標(空間単位:1km※)		22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35			
基本情報		○○		○△														
セグメント		セグメントM																
河川環境区分		区分1																
表区間		区分2																
保全区間		★																
◆経年変化情報 ①: 生息場の多様性の評価値の経年変化(過去(H20)⇒現況(H25))																		
2時期の評価の比較		22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35			
○: 基準年の中央値以上 △: 基準年の中央値以下 ×: 基準年の中央値以上(典型性4、10のみ) -: なし(数値が0) ■: 改善傾向 ■: 悪化傾向 ■: 評価対象外	陸域	1.低・中草草地	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△			
	水際域	2.河辺性の樹林・河畔林	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	水域	3.自然裸地	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	汽水域	4.外来植物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
		5.水生植物帯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	汽水	6.水際の自然度	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
		7.水際の複雑さ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	生息場の多様性の評価の比較		H6(参考)	5	2	1	3	1	2	5	6	5	6	5	3	3	4	
			H20(過去)	3	2	1	3	1	3	5	5	5	4	5	2	3	4	
			H25(現況、基準年)	5	1	3	2	0	3	4	4	3	4	4	4	5	4	
			評価値の差(H25-H20)	2	-1	2	-1	-1	0	-1	-1	-2	0	-1	2	2	0	

○○:○→○(過去も現在も良好)
 △○:△→○(改善傾向)
 ○△:○→△(悪化傾向) ※過去年も最新年の中央値で評価

環境変化の傾向

5. 河川砂防技術基準における位置づけ

○河川砂防技術基準(計画編_基本計画編, _施設配置等計画編) 令和4年6月版において、環管シートによる河川環境の評価が位置付けられている

第1章 河川環境等の整備と保全及び総合的な土砂管理 第1節 河川環境等の整備と保全

1.1 総説

<必須>

河川環境等の整備と保全に関する計画を策定するに当たっては、河川環境等の特徴、流域・沿岸の自然環境や社会環境及びそれらの歴史的な変遷等を把握し、治水・利水機能との整合を図りながら、河川環境等の整備と保全の目標を設定し、それを実現するための方策を策定するものとする。また、この際には、動植物の良好な生息・生育・繁殖環境の保全・創出、良好な景観の保全・創出、人と河川等との豊かな触れ合い活動の場の保全・創出、良好な水質の保全等を総合的に勘案するものとする。

<例示>

河川環境等の整備と保全に関する検討を行うに当たっては、以下の点に留意する必要がある。

4.「現況の環境を保全するとともにできる限り向上させる」という考え方のもとで、河川全体の俯瞰的な把握を踏まえ、「河川環境管理シート」をツールとして使いながら、河川環境が相対的に良好な場を参考として、河川環境の評価を行うこと。

出典：水管理・国土保全局，河川砂防技術基準 計画編 施設配置等計画編 令和4年6月版，2022

どこが変わったの？

1. 河川環境の評価の考え方
2. 河川環境管理シートの概要
- 3. 新たな手引きの更新部分**
4. 活用事例と今後の展望



考え方は同じ？

1. 考え方の踏襲

- 本省版手引きは、これまでの手引き（案）における**評価方法等の考え方を基本的に踏襲**している。
- **新手引きの発出によって、これまでの手引きは廃盤**とする。
- 「**河川環境管理シート**」**自体の変更はなく**、通し番号の変更、入力式の修正、注目種と依存する環境の加筆にとどまっている。

実践的な河川環境の評価・
改善の手引き
(案)

廃版
平成31年3月

公益財団法人
リバーフロント研究所

評価方法等の
考え方を踏襲



河川環境管理シートを用いた
環境評価の手引き
～河川環境の定量評価と改善に向けて～

令和5年7月

国土交通省
水管理・国土保全局
河川環境課

旧手引きで作った
環管シートも活用
できますね！



2. 新旧手引きの構成

○ 新たな手引きでは、考え方編、内容編、作成編、活用編、留意事項編として整理されている

● 実践的な河川環境の評価・改善の手引き(案) H31.3

はじめに (目的等)

1. 河川環境の評価と改善の考え方

2. 河川環境の評価方法と良好な場の設定方法 [コラム1~6](#)

3. 河川環境改善の具体化の考え方
 ・ 改善の優先度の考え方
 ・ 改善内容の具体化の考え方
 ・ [コラム7~12](#)

4. 継続的な取り組みに向けて
 ・ 取組みのサイクル
 ・ 取組みの活用場面
 ・ 技術力向上・人材育成の場
 ・ 取組みの改善に向けた課題
 ・ [コラム13~14](#)

● 河川環境管理シートを用いた環境評価の手引き R5.7

はじめに(本書の構成)

1. 考え方編 利点と留意事項

2. 内容編
 ・ 河川環境管理シートの構成

3. 作成編

4. 活用編
 ・ 評価結果を受けた情報の取り扱い等
 ・ 生息場の変化の把握
 ・ 環境改善の優先度の考え方
 ・ 評価と環境改善の取組み

5. 留意事項編

・ 河川環境区分シートにおける留意点
 ・ 代表区間選定シートにおける留意点
 ・ 河川環境経年変化シートにおける留意点
 ・ エキスパートオピニオン
 河川環境を改善する際の留意点

3. 手引きの更新 (活用上の留意点)

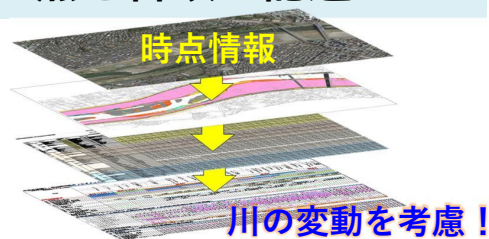
○ 環管シートの活用に関し、重要な以下4点を冒頭に記述

◆ **時点情報**であり、変動する河川環境を正しく把握するため経年変化把握等による補完が必要

◆ **相対比較**のため区分全体が低評価であった場合は「代表区間」を設定せず、空中写真や文献等を参考に過去の自然環境の状態等を踏まえた目標検討が必要

◆ **概略評価**のため、河川環境情報図等の補完によって面的な環境の広がり等の把握が必要

◆ **1 2 指標は最低限の指標**であり必要に応じて指標を補完



距離標 (空間単位:1km)		0	1	2	3	4	5	6	7
大セグメント区分		セグメント3							
河川環境区分		区分1							
典型性	陸域	1. 低・中灌漑地	-	-	-	-	-	-	-
		2. 河辺性の樹林・河畔林	-	-	-	-	-	-	-
		3. 自然裸地	-	-	-	-	-	-	-
		4. 外来植物生育地	-	-	-	-	-	-	-
	水域	5. 水生植物帯	○	○	△	△	○	△	○
		6. 水際の自然度	○	○	△	△	○	△	○
		7. 水際の複雑さ	○	○	△	△	○	△	○
		8. 連続する淵と淵	-	-	-	-	-	-	-
		9. ワンド・たまり	-	-	-	-	-	-	-
		10. 湛水域	-	-	-	-	-	-	-
		11. 干潟	-	-	-	-	-	-	-
		12. コンクリ	-	-	-	-	-	-	-
生息場の多様性の評価値		2	2	1	1	1	1	0	2

全区間低得点の場合は代表区間を定めない!



→
 ・ 水域の連続性
 ・ 河床の多孔質性
 ・ 冠水頻度
 ・ 汽水区間の延長
 必要に応じて指標を補完!

4. 一部の環境要素の定義の明確化

○ 新たな手引きでは一部の環境要素について、定義の明確化が図られている

◆ **低・中葦草地**

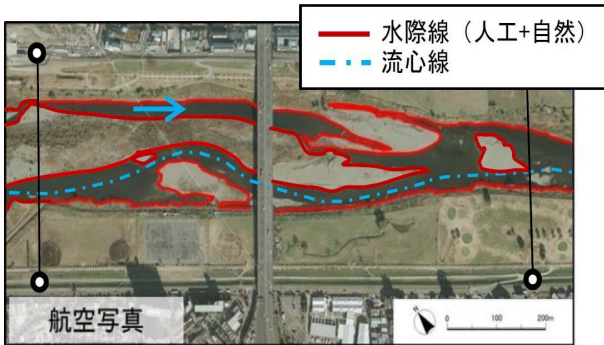
従来は参考文献の記載 → **群落リストの掲載**

◆ **水生植物帯**

従来は参考文献の記載 → **群落リストの掲載**

◆ **水際の複雑さ**

従来は流心線の定義について詳細説明なし



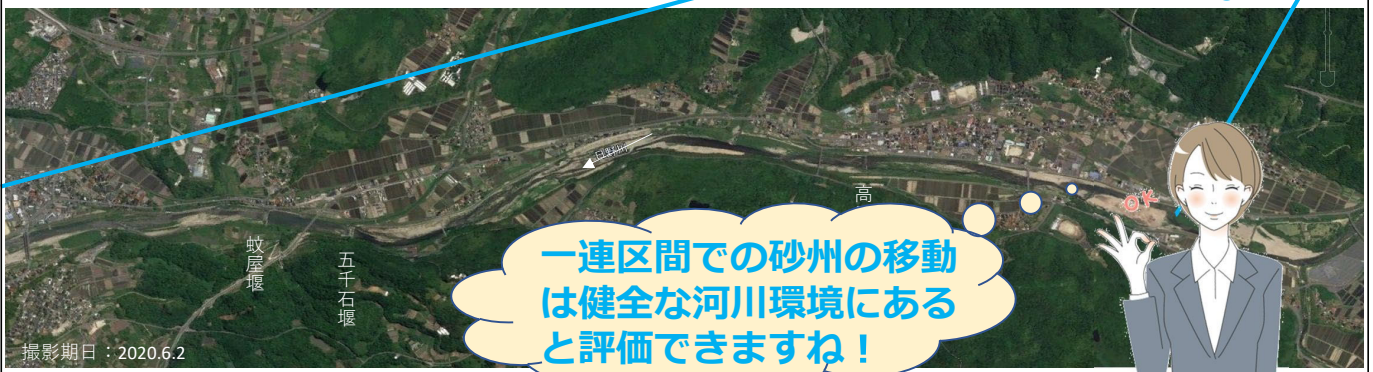
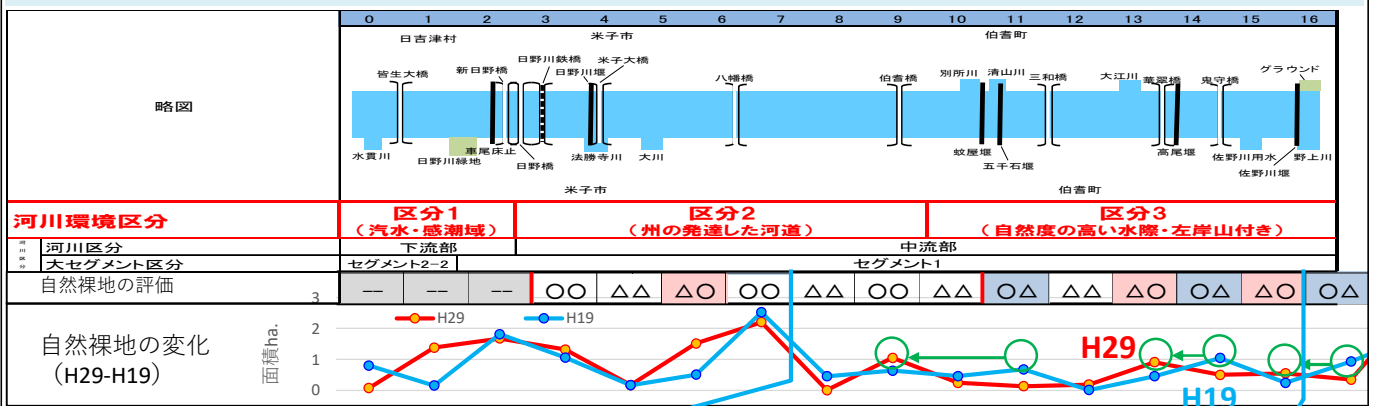
→ **流心線の設定法を定義**

このほか

- ・ 注目種と依存する環境リストの加筆
- ・ 各様式番号の修正
- ・ 経年変化シートのひな形様式における計算式のバグ

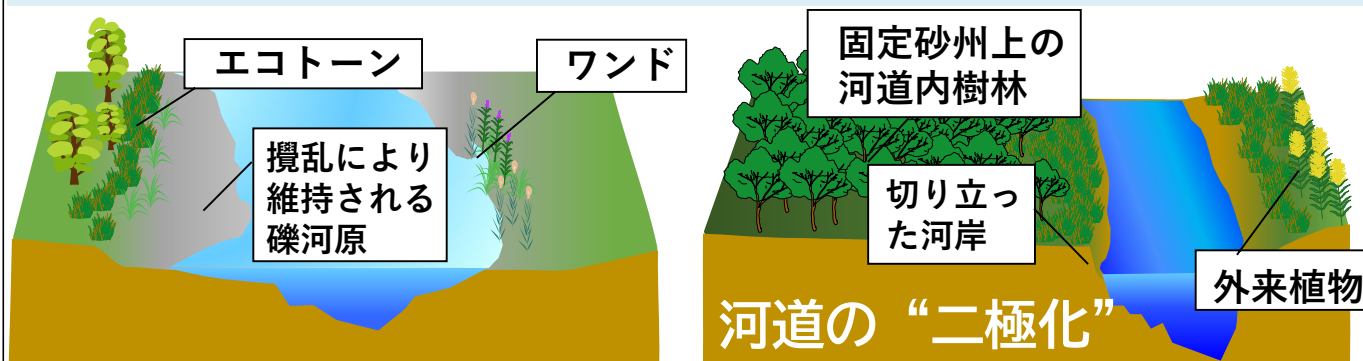
5. 一連区間における砂州の移動の評価

○ 砂州の移動に伴う評価値のスライドは、継続的な攪乱更新の結果として、一連区間において良好な状態にあると評価してよい



6. 定量データに基づく二極化区間の検出

○ 定量値に基づき二極化区間を検出可能



- ◆ 河道内樹林面積が大きくなると川らしい環境が損なわれている可能性あり！
- ◆ 河道幅/水面幅比が大きくなると川らしい環境が損なわれている可能性あり！
- ◆ 河床高は低く（深く）なると川らしい環境が損なわれている可能性あり！



定量データにて把握可能！

数値からの読み取り例は、てびきに記載されています！



7. 現地確認の必要性の強調

○ 代表区間の選定時には、データ取得時以降の環境変化や、数値に現れない現地状況を確認するため、必ず現地を確認

◆ 洪水による変化

- ・ 自然河岸としていた箇所が、洪水による侵食で人工河岸になっていた。

◆ 植生遷移による変化

- ・ 自然裸地が遷移により植物群落になっていた。

◆ 直近の改修による変化

- ・ 伐採により外来植物樹林がなくなっていた。

◆ 数値に現れない現地状況

- ・ 自然裸地であるが、軟岩が露出しており、礫河原の生物は利用できない環境だった。



8. てびきや河川環境管理シートひな形データの入手方法

○ 環管シートの手引き、ひな形は水管理国土保全局webサイト、リバーフロント研究所のwebサイトより入手可能

The screenshot shows the website interface with a list of documents. A blue arrow points from the '名前' (Name) column to the file names. Two yellow callout boxes highlight specific information:

- 水環境・国土保全局「指針・ガイドライン等」** (Water Environment and National Land Conservation Agency "Guidelines, Guidelines, etc.")
- リバーフロント研究所「手引き・ガイドライン」** (River Front Institute "Handbook, Guidelines")

名前	ファイル名	形式
tebiki_03	01_河川環境区分シート【様式】	Microsoft Excel ワークシート
tebiki_02	02_代表区間選定シート【様式】	Microsoft Excel ワークシート
tebiki_01	03_河川環境経年変化シート【様式】	Microsoft Excel ワークシート
	別紙_ひな形エクセルの修正 ★河川...	Adobe Acroba 文書

どんな活用法があるの？

1. 河川環境の評価の考え方
2. 河川環境管理シートの概要
3. 新たな手引きの更新部分



4. 活用事例と今後の展望

今後はどんな活用があるの？

4-1. 活用事例

1.河川整備基本方針への活用

2.自然再生事業への活用

3.環境改善区間への事業区分の割り付け

1-1. 河川整備基本方針への活用

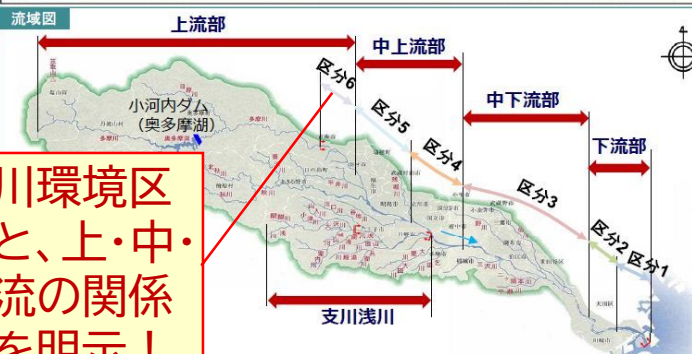
○ 河川環境区分と流程区分の整合、環境特性の反映

動植物の生息・生育・繁殖環境 概要

多摩川水系

- 上流部では、山間渓谷から小河内ダムを経て、扇状部となる羽村堰まで、谷底地形を流れる掘込河道が形成されている。
- 中上流部では、扇状地を流れ、砂礫河原からなる交互砂州が形成されている。土砂の堆積層が薄く、一部土丹が露出し、湿地が形成される。
- 中下流部では、扇状地下部を流れ、中上流部よりも粒径の細かな砂礫河原からなる交互砂州が形成されている。河岸にはワンド・たまり
- 下流部では、干潟とその岸際にヨシ原がみられ、六郷付近のワンドを伴う大規模なヨシ原が形成されている。
- 支川浅川では、礫河原からなる交互砂州やワンドが形成されている。地質的な上総層群の分布により、一部で土丹が露出する環境が形成

代表区間と注目種を環境特性として記述！

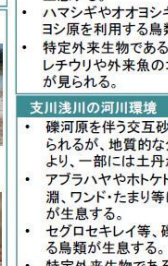


河川環境区分と、上・中・下流の関係性を明示！

- 山間渓谷部から扇状部までの斜面林を有する掘込河道区間である。
- ニッコウイワナ、ヤマメ、タカハヤやカジカ等の渓流性の魚類が生息する。
- カワガラス、イカルチドリ等の上流域や礫河原に見られる鳥類が生息する。
- 特定外来生物である外来植物のオオキンケイギク、オオカワヂシャが見られる。



- 扇状地を流れ礫河原を伴う交互砂州が発達する区間である。
- アユやウグイ等の魚類が生息する。
- セグロセキレイ等、礫河原に見られる鳥類が生息する。
- 特定外来生物である外来植物のアレチウリ、オオカワヂシャや外来魚のククチバスが見られる。



- 扇状地下部を流れ、中上流域より小さな粒径からなる交互砂州や、高水敷にワンド・たまりが見られる区間である。
- ヒガシシマドジョウ、ミナメダカ、ルムシロ等の礫河原やワンドに見られる動植物が生息する。
- コチドリなどの礫河原に見られる鳥類が生息する。
- 特定外来生物である外来植物のアレチウリ、オオフサモや外来魚のククチバスが見られる。



- 河口から潮止めとなる調布堰までの汽水区間で干潟やヨシ原が広がる。
- トビハゼやヒヌマイトシボ等の干潟やヨシ原、ワンドに見られる動物が生息する。
- ハマシギやオオヨシキリ等の干潟やヨシ原を利用する鳥類が生息する。
- 特定外来生物である外来植物のアレチウリや外来魚のククチバスが見られる。

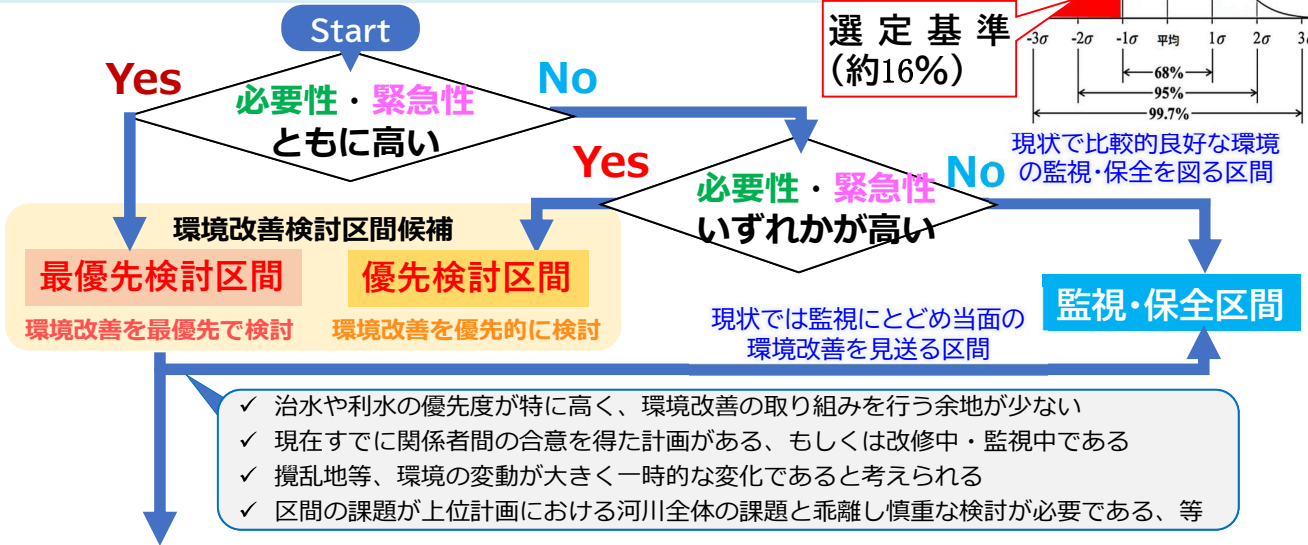
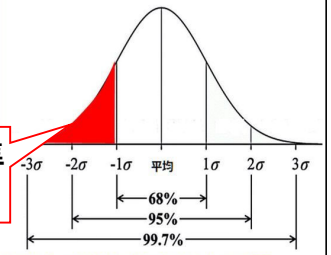


- 礫河原を伴う交互砂州やワンドがみられるが、地質的な分布(上総層群)より、一部には土丹が露出する。
- アブラハヤやホトケドジョウ等の瀬・淵、ワンド・たまり等に見られる魚類が生息する。
- セグロセキレイ等、礫河原に見られる鳥類が生息する。
- 特定外来生物である外来植物のアレチウリ、オオフサモが見られる。



3-1. 環境改善区間の割り付け（多自然川づくりor自然再生）

- 環境改善の**必要性** = 代表区間との評価値の**差大**
- 環境改善の**緊急性** = 2 時期の評価値の**差大**



- | 改修時検討区間 | 環境改善検討区間 | 自然再生検討区間 |
|--|---|----------|
| 河川改修時に自然環境の再生・創出を図る区間
● 治水・利水の優先度の高い区間
● 改修済み、改修予定の区間
● 樹木管理・維持掘削等の維持管理必要区間、等 | 自然再生事業等により特別に施策を講じ自然環境の再生・創出を図る区間
● 特に重要な環境要素が存在する区間(重要種の生息・生育・繁殖環境)や保全区間
● 事業効果の高い区間(代表区間等の隣接区間、支川合流部、山付き部など)
● 市民が大切にしている環境の存在区間(水辺の楽校等)、等 | |

3-2. 環境改善区間の割り付け（多自然川づくりor自然再生）

- 環境改善に向けた**緊急性**、**必要性**の抽出結果を参考に、多自然川づくりと自然再生による事業区間を割り付け。

河川環境区分:		区分①					区分②					区分③					区分④															
◆生息地の多様性の評価値の経年変化(過去(H21)⇒現況(R1))		↓代表区間					↓代表区間					↓代表区間					↓代表区間															
距離標(空間単位:1km)		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
○: 基準年の中央値以下 △: 基準年の中央値以上 ×: 基準年の中央値以上(典型性4、10のみ) -: なし(数値が0) □: 改善傾向 ■: 悪化傾向 ■: 評価対象外	2 時期の評価の比較	[Grid of symbols representing diversity changes]																														
	生息地の多様性の評価値の比較	[Grid of symbols representing diversity comparison]																														
	環境改善の必要性・緊急性の評価	必要性	[Grid of numerical values]																													
		緊急性	[Grid of numerical values]																													
		優先度	[Grid of numerical values]																													
		優先度	[Grid of numerical values]																													
	河川改修	実施済区間	[Grid of symbols]																													
		実施予定区間	[Grid of symbols]																													
		実施済区間	[Grid of symbols]																													
		実施予定区間	[Grid of symbols]																													
	監視・保全区間とした理由		自然再生 自然再生施工直後 堰上下流 自然再生 多自然 多自然																													

4-2. 今後の活用の可能性（定量的な環境目標の設定）

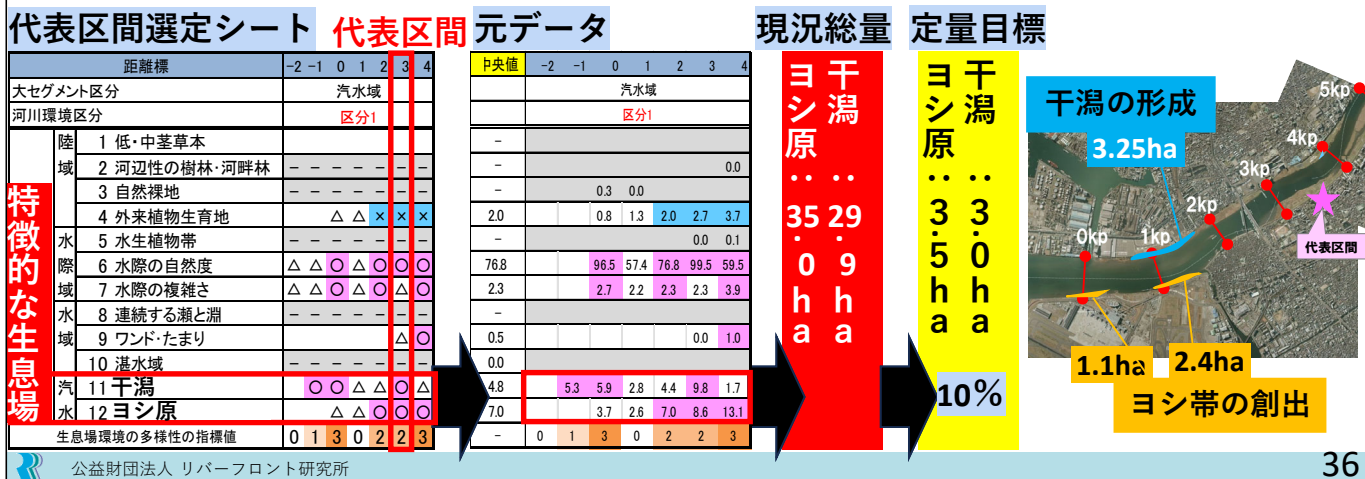
○環管シートの定量値を活用して河川環境目標を設定可能

◆英国の先進的な取り組み

- 英国イングランド『生物多様性ネットゲイン政策』すべての開発事業ごとに生物多様性を10%増やす定量目標が新たな環境法（2021年11月）に明文化され、2023年11月に必須となる。

出典 中村圭吾, 2022.

例えば... 河川環境目標⇒10%環境改善!

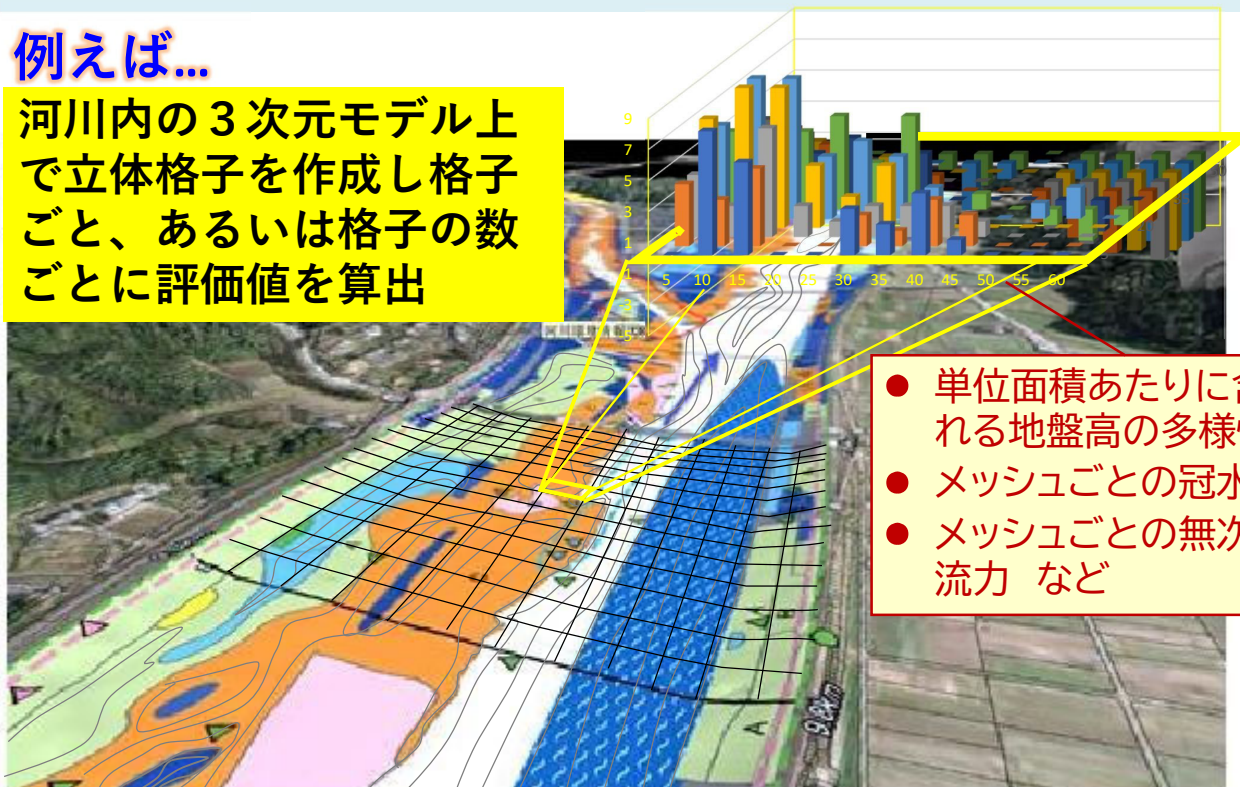


4-3. 今後の活用の可能性（DXによる環境評価指標の拡張）

○3次元データによる川づくりの進展と合わせた河川環境評価指標の拡張

例えば...

河川内の3次元モデル上で立体格子を作成し格子ごと、あるいは格子の数ごとに評価値を算出



- 単位面積あたりに含まれる地盤高の多様性
- メッシュごとの冠水頻度
- メッシュごとの無次元掃流力 など

5. 環管シートの相談窓口

○リバフロサポートセンターへの問い合わせが可能

公益財団法人
リバーフロント研究所

お問い合わせ アクセスマップ ENGLISH
YouTube note

ホーム 研究所について 研究テーマ 活動成果 **リバフロサポートセンター**

◆ リバフロサポートセンターの窓口
現在、テーマ別に4つのサポート窓口で構成しています。各テーマの関連情報の入手、また相談については、各サポート窓口をクリックしてください。また、どの窓口で相談すべきか分からないテーマについてもお気軽にご相談ください。

多自然川づくり かわまちづくり
河川環境管理シート 小さな自然再生

◆ 設立の背景と目的 **河川環境管理サポート**
公益財団法人リバーフロント研究所は、河川・流域の治水・自然環境・生態系、水循環系、水質・水環境の観点から、これからの社会のあり方や価値観を提案し、その実現に向けた研究・技術開発・普及啓発などの活動を通じてその解決を図るとともに、現場実務者との協働を通じてスタンダードをつくり社会実装させることに日々挑戦しています。私たちが強みとするテーマに関連する情報、研究成果、技術等を還元するだけでなく、研究者・技術者・研究者など全国の治水と環境保全に関心のある方々を支援することを目的としています。

◆ リバフロサポートセンターの概要
・所在地：東京都中央区新川1丁目17番24号 NMF茅場町ビル7階（公益財団法人リバーフロント研究所内）
・センター長：中村圭吾（副センター長：都築隆博）
・4つの機能：川づくり・まちづくり・流域づくりに関わる次の機能を担います。
①技術開発・普及・・・強みとするテーマの技術開発及び普及啓発
②情報提供・・・ナレッジ集約及び情報発信
③人材育成・・・研修会、セミナー、講師派遣を通じた実務者等の人材育成
④海外展開・・・地域連携・・・日本の経験の海外普及及び海外知見の日本への還元

◆ リバフロサポートセンターへの問合せ
リバフロサポートセンターへのお問合せは、お気軽にメールにてご連絡をお願いします。
お問い合わせ先：supportcenter@rfc.or.jp
多自然川づくりサポート担当：内藤大輔（自然環境グループ）
河川環境管理シートサポート担当：白尾家宏（自然環境グループ）
かわまちづくりサポート担当：阿部充（水循環・まちづくり・防災グループ）
小さな自然再生サポート担当：和田彰（水循環・まちづくり・防災グループ）

令和4年度は10件のご相談をいただきました！

公益財団法人 リバーフロント研究所

ご清聴ありがとうございました。

只見川@銀山平

公益財団法人 リバーフロント研究所